

和牛繁殖農家の 収益性向上に向けた 三つのポイント

和牛繁殖農家の収益性向上のポイントは、①牛舎等にかかる初期費用を削減すること、②繁殖雌牛用の粗飼料を自給すること、③母牛を1年1産させ、子牛を事故なく適切に発育させること、の三つである。これらを実践し、高いレベルで生産成績を維持している農場を紹介する。

和牛素牛生産におけるコスト削減

この農場は平成19年に新規就農した和牛繁殖農場である。農場立ち上げの際、可能な限り低コストで始めることをめざし、ビニールハウス牛舎を採用（写真1）。ほぼ自作で組み立てたため、総費用は基礎工事含めて300万円程度に抑えることができた。

また、繁殖雌牛のうち人工授精ならびに妊娠確認が終了した牛を対象に、5〜11月まで放牧管理している（写真2）。電気牧柵のみのコストし

かかからず、粗飼料コストも削減することができ、休耕田の有効活用にもつながっている。

さらに自給粗飼料を自ら生産。イタリアンライグラスを作付、ラップサイレージ（写真3）をつくり、繁殖雌牛の粗飼料として給与している。これにより通常1日1頭当たり7kg程度給与する繁殖雌牛の粗飼料コストの削減を実現している。現在、3分の1程度の自給にとどまっているため、今後さらに自給粗飼料の生産を増やし自給率100%にできるようめざしている。

生産性向上の取り組み

繁殖雌牛の1年1産、子牛の事故率低減の二つを軸に取り組んでいる。前者は繁殖雌牛に空腹感を与えないよう、常にフェースストローや稲ワラ等の粗飼料を切らさず給与。

繁殖雌牛に空腹感を与えるとストレスがかかり、結果として繁殖成績の低下や産まれてくる子牛に悪影響を与える可能性があるからだ。また分娩時の事故を防止するため「*分娩監視システム牛温計」を導入し、分娩時に必ず立ち合いができるように徹底。さらに子牛の事故防止対策については、ワクチンプログラムのほかに、2週間に1回の床換えを行い床を常時清潔に保っている。これにより子牛のストレス低減や、ふん便の

状態確認がしやすくなるため、下痢の早期発見・早期治療につながる。

給与体系には出荷までの期間、配合飼料を去勢は4kg、雌牛は3・5kgを上限とし、それ以外は粗飼料をできる限り食わせ込むことで腹づくりを意識している。

その他、繁殖雌牛の更新も重視。繁殖雌牛から産まれた時点できかに活力のある子牛であるかが、その後の哺育育成時の発育に大きく影響するためである。このような取り組みの結果、繁殖成績は過去3年度ともほぼ1年1産を実現（表1）。また子牛の事故率は分娩時を含めて、今年度は1頭も発生していない（表2）。今後は地域の中核農家となるべく、規模を繁殖雌牛100頭レベルまで拡大することが目標である。

DATA 事業規模

所在地：関東地方

飼養頭数：和牛繁殖雌牛40頭

コスト削減対策



Point!

採光に優れた開放感のある牛舎。太陽光により敷料の乾きも早い

Point!

飼槽に廃プラ缶を活用してコストを削減する



写真1：低コストなビニールハウス牛舎



写真2：休耕田を活用した放牧



写真3：ラップサイレージの自給粗飼料

農場の成績の推移

表1：繁殖成績

	分娩間隔(日)
平成20年	375
平成21年	356
平成22年	365
平成23年(～8月)	368

表2：子牛の事故率(流死産含む)

	分娩頭数(頭)		合計(頭)	事故頭数(頭)	事故率(%)
	雄	雌			
平成20年	6	10	16	1	6.3
平成21年	9	11	20	2	10.0
平成22年	18	17	35	2	5.7
平成23年(～8月)	15	11	26	0	0.0